## 委員会だより

＜11月8日(日)　13名出席＞

【１】財務報告：98年10月度決算報告(甲斐さん)
- 特記事項：・山崎神父様より特別献金を447、000円を頂く。・火災保険料　206、250円を支出。

【２】議題：

(1) 11月15日の七五三のお祝：　対象者16名程度。ごミサ前に典礼委員が主旨を説明。
(2) バザー会計報告：
- 収入合計624,908円支出96,402円バザー収支528,506円 その他収入(*)　63,000円　合計591、506円
  (*) 聖母の園 50,000円、立場地区センター 3,000円、清水セツ子様 10,000円
- 上記合計収入より、慰労金2万円(壮、婦各1万円)、寄付金 3万円 を支出する。
- 予定通り上記収入より50万円を建設会計に入れる。
- ご参加、協力頂いた皆様、ご苦労様でした!!

(3) 11/16～11/20山崎神父様が黙想会ご出張(於中軽井沢)
(4) 12/13「許しの秘跡」は鵜飼神父様がご担当。
(5) 教区司祭館建設拠出金：　総額3.5億円の建設資金の内、教区が準備するのは1億円、残り2.5億円は小教区が負担の前提。横浜司教区信者数は約 5万人で、頭割りで考えると約 5千円見当となる。あまり無理をしないこととし50万円程度を考えたい。いずれにせよ信徒各位に説明する。(於信徒総会)
(6) クリスマス飾付け日：　近々行う。
(7) 信徒名簿の配布：クリスマスまでに配布する。
(8) 聖堂内下足化見送りで、スリッパを50足購入。
(9) ガス会社の点検で、会議室内の湯沸器の交換が必要との勧告が出たが、「撤去」することに決定。
(10) 来年度「聖歌の集い」: 99年4月25日 保土ヶ谷教会
- 司式はコロンバン会のタラン神父様で、講話／実技指導は槙田さん。

(11) 11/23に教会学校リーダー研修会が開催され、中和田からは青柳さん、内藤さんが参加予定。
(12) 11/25迄に、99年度予算を教区に提出(甲斐さん)
(13) 環境を考える会(七浦さん)：
- バザーで分別収集に協力頂き、感謝。
- 問題点: ヤキソバなどに使用するプラスチック容器が、横浜市の規則では「燃えるゴミ」に分類されていること、またダンボールのゴミが多かったこと等。

(13)10/31に藤沢教会で典礼の勉強会が開催された：
- 通夜・告別式に関し、他の教会の状況は雪ノ下教会の場合料金 40万円、その他は10万円程度が多い。
- 祭壇の前には棺のみで、花は側壁に飾る。
- 未信者の葬儀参列の場合、祈りはよく理解されないので、歌を多く使うなどの工夫がなされている。

## 壮年会だより

＜11月15日(日) 8名出席＞

1. 委員会報告
2. 宣教委員会の環境を考える会の活動の一環としてバザー時の分別ゴミ収集の件が報告された。おおむね良好だったとのこと。(宮崎さん)
3. 山田さんよりネパールの登山紀行のお話を伺った。

## 婦人会だより

＜11月15日(日) 38名出席＞

✪ 委員会報告
✪ バザーについて
- 来年度に向け反省や要望等、意見が多数出ました。
- 来年度のバザーに役立てたいと思います。
- 皆様の御協力ありがとうございました。
- 今年は常時使用できるコート掛けを購入することになりました。

✪ クリスマスについて
- 婦人会としては今年のクリスマスはティーパーティー形式にするという意見が提案されました。

✪ クリスマス前の大掃除
- 12月19日(土)10:00～　　御協力お願いします。

✪ 来月号の会報に載せる為の原稿をお願いします。
✪ 来年度の役員候補
　Ａ地区　　川原さん、森田さん
　Ｂ地区　　宮崎(ヒ)さん、横塚さん
　Ｃ地区　　北川さん、清尾さん(福音宣教)
　Ｄ地区　　楠田さん、松田さん

**次回例会は12月20日(日)、次回当番はD地区です。**

## お知らせ

**結婚・転出**

11月22日(日) 於 東京大司教座聖堂
ヨハネ・ボスコ　　横塚　敦
マリヤ・アグネス　　恵美子 (及川)
〒173-0004　東京都板橋区板橋 4-23-3
高助グリーンハウス 5-503

**訂正**　広報なかわだ 第240回 委員会報告の(2)項「環境を考える会」設立の件で誤りがありました。
(誤) 婦人会: 町田、石井、江尻さん
(正) 婦人会: 町田、石川、江尻さん

## ミサ 当番表　(98年12、1月)

| 月/日 | 主 日 | 朗読、奉納 | オルガン | 月/日 | 主 日 | 朗読、奉納 | オルガン |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 / 6 | 待降節第二主日 | 壮 年 会 | 大 宮 | 1 / 3 | 主の公現 | 壮 年 会 | 岩 渕 |
| 12 /13 | 待降節第三主日 | 青 年 会 | 岩 渕 | 1 / 10 | 主の洗礼 | 青 年 会 | 美 底 |
| 12 /20 | 待降節第四主日 | 婦人会D地区 | 美 底 | 1 / 17 | 年間第二主日 | 婦人会A地区 | 森 田 |
| 12 /24 | 主の降誕(夜半) | 青 年 会 | 森 田 | 1 / 24 | 年間第三主日 | 壮 年 会 | 大 宮 |
| 12 / 27 | 聖家族の主日 | 壮 年 会 | 大 宮 | 1 / 31 | 年間第四主日 | 婦人会A地区 | 岩 渕 |

※当番の方は10分前には集合して下さい。
※ご都合の悪い方は典礼委員までお申し出下さい。　(萩原: TEL 802-6258)




# 広報 なかわだ

第242回

48年 12月号

中和田カトリック教会
広報委員会発行
泉区中田北 1丁目 9-1
Tel. (045) 803-6141
1998年 12月 7日


**今月の予定**

| | |
|---|---|
| 委員会 | 12月　6日 |
| 赦しの秘蹟 | 12月 13日 |
| 主の御降誕 | 12月 25日 |
| サロン | 12月 13, 27日 |
| レジオ | 12月 11, 18日 |

# 喜 ば し い 事

山崎 正俊

けわしく高い山がそこにある。けれども誰でもが、すぐに頂上をめざすのでもないようだった。神学校では、全員が同時に同じとき同じことを聞かされているが、入学年の順に卒業してゆくことになる。しかし、その理解の程度は同じではない。四年目の人もあればはじめの年度の人もあり、人生経験の深浅濃淡の差が、そのついでに耳にする言葉を心の奥に焼きつけたり、そうさせなかったりするうえに、くりかえされると、わずらわしくもムダなことだと、軽くあしらったりしてしまうことがある。

名前がアルファベット順に並べられることから、あとのほうに記された者は、先きのほうの者がスグレ者だと思い込まされてしまったものだ。変なことだナ。

いろいろなシキタリが、いろいろな理由から、その心の集中力にエイキョウを及ぼすのかもしれない。変なことだな。気がついたときには、間にあわない。実際にそうなっていた。私は、すこし「間」を置いて飛びあがったり、いくらかのマワリ道をしたり、あとあとから、ゆっくりとついていった。そうすれば、時がすぎると、その思いちがいは消されてゆくようだった。他の人とは異なった視点や感受性さえ身についてしまうことになる。おかしなことだ。聞こえない声が聞こえる。見えない筈のものが見えるようになる。――そうです。同じはずのものが、同じではないらしい。奇妙なことだナ。

私のケイケンは、というよりも、誰でもがそれまでに受けたものとか、受けさせられたものとかによって、似たものから、いろいろなネウチを身に着けることがあり、そのツミカ　ネは、驚くほどの豊かさをもたらしたりするだけでなく、どんなに愚かな人だと思われる人でも、実は尊敬するにたるものを示しながら、気が付かれないままに消えさせられるということにもなる。自分以外の方々はすべて「私の先生」ということに思い当っているとすれば、これはたいした知恵を与えられている者ということがある。

この十一月の十六日から二十日(月曜日から金曜日)の五日間と、それに続いての半月あたりも、私には、忘れられない日々になっている。ありがたいことだ。

「下町の神父」は、このところ、偉大な地歩を進んでいるようだ。あんたも、自分の好きなことしかしないようだから、たぶんことわるだろうと思っていたが、そうしないで、ようも引き受けてやっておるのにはと、例の大声で嬉しげに笑いとばされてみると、なんだか、ホメラレテルみたいで、どうお受けしたものかと、トチメンボウを振ったわけだったのが。(ここで、話がこじれてしまった)

実は、このことは、断るつもりで、「この日もだめです」「その日でもだめです」と云っていたら、それでは「次の週ならよいのだね」と追い込まれてしまい、「どうもすみませんでした」ということで、こうなってしまったのです。頭のよいのにはかないませぬ。

――おかげで、今年の黙想会は、私にとっては、気楽な有り難いものとなったのです。――これは、止むなくも、豊かな収穫の秋。

(1998.11.29)

# 浦島太郎のお話し

美底 昭司

今年のゴールデンウィークに家族では初めて、そして私自身では７年ぶりに里帰りしました。 その故郷（波照間島）へは、羽田から石垣島へ飛行機で約３時間、そして石垣島から高速船で約1時間30分を掛けて到着しました。

久しぶりの故郷の香りと風景を目の当たりにすると、幼い頃の思い出と現在の4人家族の自分とがダブって見えてきて、かなりの年月が過ぎてしまったんだなと実感しました。

そして、子供たちと両親の初顔合わせです。人見知りする子供ですが、不思議と「おじいさん」、「おばあさん」と直に馴染んでしまいました。

そこへ、「浦島太郎さん！」と近所のおばあさんに声を掛けられ、直にその「浦島太郎さん」の意味が分かりました。 私も笑いながら「浦島太郎です」と答えていました。

翌日は、絶好の海水浴日和、家族で海水浴へ出かけました。

真白の砂浜とエメラルドグリーンの海、真青な空には白い雲がぽっかりと浮かんでおり、子供たちは大はしゃぎです。

私も水中メガネをつけて、泳ぎながら黄色や青など色とりどりの小魚さんを見つけては、「昔とちっとも変ってないね」と呟いていました。ここは「竜宮城」と思い、昨日のおばあさんが言った浦島太郎を思い出し可笑しくなりました。

しかし、その変わっていないと見えている小魚さんは、当然ながら幼い頃に見た小魚さんではないが、私が見ると「昔と全く変わっていない」と見えるのは何故でしょうか。

人間はどうだろう、「紀元前から今時の若い者は･･･と言っており、現在とちっとも変わっていない」と言う人、または「科学、医学の進歩した事を理由にかなり進歩している」と言う人もいる。

神様は人間をどのようにご覧になっているのでしょうか。

私は、ボランティアを日常としている人や、地球資源あるいは、地球環境に取組んでいる人々が身近にいることで、人間は進歩しているんだと言いたい。

しかし、自分自身を見つめると恥ずかしくなるが、せめてあの小魚さんが変ってないように、信仰を大切にして更に子供たちへ伝承しなければと思っています。

## 書籍紹介

### 菅原裕二神父 著「イエスの語った希望のことば」（女子パウロ会発行）

待降節を迎え、我が中和田教会にも恒例の馬小屋が飾り付けられました。最近読んだ書物にこの馬小屋に関する興味深い一節がありましたので、ここにご紹介します。

この本はバチカンから電波にのせて送られる日本語の番組「キリストのおしえ」をまとめたものです。キリストの教え、聖歌の調べ、歴史をひもといて、ローマ教皇の声など多彩な内容で、放送時間は毎日午前6:30～6:56、再放送午後10:15～10:41とのことです。

## 飼い葉おけに寝かされた幼子

クリスマスにはクリスマスツリーなどと並んで、日本でもクリスマスの「馬小屋」がよく知られてきているようです。飼い葉おけに寝ている幼子イエスとそれを囲む父ヨセフ、母マリア、そして牛やろばの像、さらに羊飼いや、ターバンを巻いたりした三人の大人の像が置かれることもあります。今日はこのクリスマスの馬小屋について少しお話ししましょう。

イエスの誕生に関する物語は、マタイによる福音書の第1章と第2章、またルカによる福音書の第2章に見られます。ところがそれは、イエスの受難や十字架上での死、復活の記述とは違って、かなり後になってできあがったものです。それでこのクリスマスの馬小屋の背景となっている歴史的な事実を正確に知ることは、残念ながらできないと言わなければなりません。でも福音書を書き残した人々は、物語の中で多くのシンボルを用いて、

イエスの誕生についてのメッセージを伝えてくれています。それを一つ一つ見ていきましょう。

まず馬小屋なのですが、福音書には馬小屋ということばは見当たりません。あるのは飼い葉おけということばです。飼い葉おけがあったのだから、当然家畜がいた場所だったと思うのですが、小屋であったか、あるいは当時土地の人々が用いていた雨風をしのぐための岩の洞のような場所であったか、それはわかりません。ルカの福音書は短い記述の中で三度もこの飼い葉おけということばを用いています。これは旧約聖書のイザヤ預言書(第1章)にある表現で、ろばや牛が自分の主人を見分け、そのもとに帰っていく先というシンボルとして使われていることばです。飼い葉おけとは神さまに愛されたイスラエルの民が、自分の帰っていくべき場所として示されているものです。イエスこそ人間が帰っていくべきところであるという意味が含まれているのかもしれません。

ルカ福音書第2章には羊飼いも登場します。ベツレヘムの町の近くに野宿していた羊飼いたちに天使が現れ、こう告げるのです。「恐れるな。私は、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」(2章11節) 羊飼いというのは当時の社会で決して高い地位にあった人たちではありません。教養も高くはなかったでしょう。今日と同様、牧畜は決して楽な職業ではありませんでした。当時、安息日のおきてなど、律法を正確に守ることができない者に数えられ、それゆえ、罪びととさえ見なされている人たちでした。救い主がこの世に生まれたとき、その知らせをいちばん先に受けたのは、社会の中で目立つことのない、こうした人々だったというのがルカのメッセージです。

マタイ福音書の第2章を見ると、今度は東の国からやってきた博士が登場します。マタイ福音書だけが伝えるこの物語には、学者たちの人数も名前も記されてはいませんが、教会の伝統の中でしだいに脚色されて、バルタザール、メルキオール、カスパーという三人になって定着しました。彼らは当時の占星術に通じていた人たちだったようです。昔は星の動きを見て人間の運命を占うことが盛んで、占星術は学問の中でも重んじられていたものです。博士たちは空の星を観察していて、大きな星を見つけたのでしょう。その意味を尋ねてさまざまの文献を調べてみると、ユダヤに伝わっているダビデの星の古い言い伝えに思い当たります。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(2章2節) 星に導かれてエルサレムにやってきた博士たちのこうしたことばから、彼らがその星をユダヤに生まれた王のしるしとして考えたということがわかります。

マタイは星に導かれた彼らが、ベツレヘムに着き、母マリアと共にいる幼子イエスを見て「ひれ伏して拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた」(2章11節)と続けています。この三つの贈り物ですが、やはり旧約聖書のイザヤ預言書に、救い主が現れるとき、人々は「皆、黄金と乳香を携えてきて、主の栄誉を宣べ伝える」(60章7節)とあることから、救い主、王としての象徴です。黄金、乳香というのは当時の最も高価な贈り物でした。黄金は王としてのシンボル、乳香は聖性のシンボルとして使われています。ところが没薬というのは、亡くなった人の埋葬のために遺体に塗る薬のことです。誕生の贈り物としてはあまり縁起のいいものではありません。しかし、これは人知れず生まれた救い主がどうやって人々を救うのか、つまり十字架上で自分の命を与えつくして亡くなる、ということを暗示するシンボルに　っているように思います。三人の博士がイエスを訪れたという物語は、イエスがユダヤの民だけでなく、異　の民にとっても光として現れたという知らせとしての意味を持つものになっています。

さてこれで天使、牛、ろば、羊飼い、三人の博士と贈り物、とイエスを囲むクリスマスの馬小屋の登場人物がそろいました。最後にイエスの最も近くにいるヨセフとマリアなのですが、ヨセフと身重のマリアが、わざわざ自分の町を離れてベツレヘムの町へ旅をしなければならなかったのは、当時ユダヤを支配していたローマ帝国の総督が人口調査を命じたからだとルカ福音書は伝えています。人口調査をしたのは、税金を取り立てたり、徴兵したりするためだったからでしょう。皇帝アウグストゥスの勅令、と言えば、当時の地中海世界、福音書を書いた人たちにとって、この世の最高の権力者の命令のことです。ヨセフ、マリアは「その他大勢」の中の一員に過ぎません。力を持つ者が権力をふるい、支配されている貧しい人たちがそれに従っているという歴史・日常のただ中に父なる神さまはそのひとり子を送り出したのです。

マリアにとって出産は初めての経験でした。子供を産むことに不安もあったと思います。そのマリアのために「宿屋には泊まる場所がなかった」(ルカ2章7節)のです。神さまは、そんなあしらいを受けても、世の救いの計画を変えようとしません。世界のための「しるし」である、飼い葉おけで静かな寝息をたてる救い主イエス、それはユダヤの民が待望していた政治的なメシアとはまったく違った姿をとっていました。クリスマスの馬小屋の背後には、神さまの不思議なわざが隠されているようです。